

水辺での遊びが子どもの発達にもたらす効果について

秋田大学 学生員 ○清水 理
秋田大学大学院 学生員 佐々木 善和
秋田大学 正会員 木村 一裕

1. はじめに

近年、都市化の進展による遊び場の減少や、塾や習い事など生活習慣の変化により、子どもが外遊びをする機会が減少してしまっていることが問題視されている。子どもの感性を磨き創造性を育むことができる場である水辺空間もまた、時代の流れとともに水質汚染、地域開発や護岸整備などの原因により、規模の縮小や単調に整備された空間となってしまう、子どもだけではなく人々からも疎遠になっているのが現状である。

本研究では、子どもの日常的な外遊び環境・生活習慣および現在の発達状況や水辺での遊び経験や希望を把握すること、また水辺での遊びと発達効果との関係を明らかにすることを目的としている。

2. 調査対象の概要

秋田市内の2つの小学校の高学年の児童とその保護者を対象にアンケート調査を実施した。外遊びや生活に関する調査概要は表-1の通りである。外遊びの回数・ゲーム時間は両校とも男子の方が若干多く、習い事の回数については、下流地域の児童の方が上流の児童よりも多かった。

表-1 アンケート調査概要(平均値)

学校名	川との位置関係	回答数(人)		外遊び回数 [回/週]	習い事の回数 [回/週]	テレビゲーム 時間[分]	睡眠時間 [時間]
		男子	女子				
A小学校	上流	34	37	2.3	1.6	90	7.4
				1.3	2.0	60	7.7
B小学校	下流	37	32	1.8	2.0	90	7.2
				1.4	2.6	70	7.3

3. 親から見た子どもの発達の効果と水辺の遊び

子どもの発達の効果と水辺の遊びの関係を明らかにするため、保護者が水辺での遊びの経験を通してどのような効果を得ることができたのかをたずね、まとめたものが図1である。

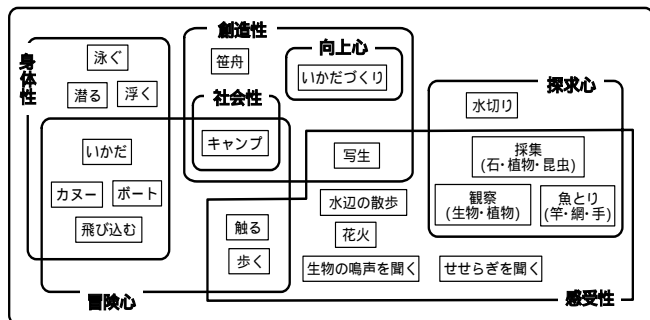


図1 発達の効果と水辺の遊びの関係

4. 水辺での遊び経験

全24種類の水辺や川原での遊びを提示し、「したことのある遊び」「してみたい遊び」「あまりしたいとは思わない遊び」にあてはまるものをそれぞれ答えてもらい、子どもの水辺の遊びの経験や希望を明らかにした(表-2)。また、保護者が児童期にどのような水辺の遊びをしたことがあるかも調査し、世代により以下のような違いが明らかになった。

現代の子どもの多くが「したことがある」と答えた水辺の遊びは提示した遊びの半数にも満たなかった。

「カヌー」「キャンプ」などの道具や指導者が必要となる場合のある冒険的な遊びを「してみたい」と望む子どもが多いことが分かった。

「したいとは思わない遊び」と答えた遊びは24種類中11種類で、どの遊びについても約50%近くの児童が「したくない」と答えていることから、「せせらぎを聞く」「笹ぶねを作る」など保護者が児童期に遊んでいた遊びは伝承されず、関心が薄れてきているのではないかと考えられる。

表-2 水辺の遊び経験(一部抜粋)

子ども	水辺での遊びの種類	保護者の児童期	水辺での遊びの種類
したことのある遊び	「泳ぐ」「魚をとる・釣る」「花火」「水切り」「散歩する」「水に触れる」「水に潜る」	したことのある遊び	「泳ぐ」「魚をとる・釣る」「散歩する」「水に触れる」「花火」「いかだに乗る」「水に飛び込む」「笹ぶね」「せせらぎを聞く」「写生」
してみたい遊び	「カヌー」「ボート」「キャンプ」「いかだに乗る」	したことのない遊び	「いかだをつくる」「カヌー」
あまりしたいとは思わない遊び	「水に飛び込む」「笹ぶね」「せせらぎを聞く」「写生」「いかだをつくる」「昆虫採集」		

5. 子どもの発達の効果

日常生活における子どもの発達の効果を指標化するために、子ども個人に対し表-3の質問を行った。発達の効果については、それに対し肯定的に答えている場合には1点、否定的に答えている場合には0点として、この得点の合計を子どもの発達の効果の値とした。(24点満点)

表-3 発達の効果に関する質問

指標	発達の効果に対する質問
身体性(3点)	「スポーツをする時など自分の思ったように体を動かすことができる。」 「食べることが楽しい。」 「夜よく眠れる。」
社会性(4点)	「休み時間に友達とよくしゃべる。」 「大人と遊ぶことが多い。」 「みんなと仲良く遊べる。」 「小さい子どもの面倒をみたり、助けたりできる。」
感受性(4点)	「自然や動物とふれあうのが好きだ。」 「テレビ番組や本を読んで感動するとすぐ涙がでる。」 「友達がいじめられているのを見ると悲しくなる。」 「好きな音楽をきくと、リズムに合わせて体が動く。」
創造性(4点)	「ものを組み立てたり、作ったりすることが好きだ。」 「なにかをする時集中できる。」 「よく絵をかいたり、文章を書いたりする。」 「いろいろな遊びを思いいついて遊べる。」
冒険心(4点)	「外国へ行ってみたい。」 「いたずらをするのが好きだ。」 「難しいことにも挑戦できる。」 「体を動かす遊びが好きだ。」
向上心(2点)	「1度失敗してもあきらめずにまたチャレンジできるほうだ。」 「スポーツや習い事をもっとうまくなりたい。」 「スポーツや習い事をもっとうまくなりたい。」
探究心(3点)	「いろいろなものに興味や関心を持つ。」 「物事を知ることや考えることは楽しい。」 「不思議に思うことや、新しい発見などをするのが多い。」

発達の効果の値を男女別平均(表-4)で比較してみると、ほとんどの項目で男女の差はないが、感受性の指標については女子の方が男子より約20%高い値を示した。

表-4 発達効果の平均値[%]

性別	回答数[人]	身体性	社会性	感受性	創造性	冒険心	向上心	探究心
男	71	76.5	71.1	39.1	52.1	63.4	73.2	58.7
女	69	74.9	72.5	60.1	54.0	62.7	77.5	48.3

表-4 の子どもの発達効果から、現在の日常生活において感受性や創造性、探究心などをもたらす活動が少ないのではないかと考えられる。その効果を補うための一つの手段として、水辺での遊びではどのような遊びを特に行えばよいのかを図1を参考にし考察すると、「せせらぎを聞く」「写生」など五感を使った遊びや「笹ぶね」「いかだづくり」のような自然から物をつくる遊び、「観察」「採集」などの自然と触れ合う遊びができる環境づくりやイベントの提供をすることで子どもたちの発達の効果を補うことができるのではないかと考えられる。

5. 水辺の遊び環境の考え方

子どもの頃に水辺の遊びを楽しみ、今でもその思い出が心に残っており、子どもにもさせたいと思っている保護者は比較的多かったが、事故や犯罪に巻き込まれることを心配し、子ども達だけで水辺での遊びをさせることを懸念する声が非常に多かった。子どもに水辺で遊びをさせることについて、保護者は以下のように考えていることが分かった。

「観察」「水切り」など、あまり水に近づかず川原でできる遊びは子ども達だけでさせたいという傾向がある。

「飛び込む」「泳ぐ」などの直接水に触れる遊びについては、保護者が見守っている環境で遊んで欲しいと望んでいる。

道具や知識が必要な遊びについては指導者がいる環境で遊ばせたいという傾向がある。

「泳ぐ」「潜る」など水に入って遊ぶ遊びをさせたくないという回答した保護者はいたが、ごく少数しかおらず、大人がそばにいれば大抵の遊びをさせても良いと考えてよい。

表-5 水辺での遊びに対する親の考え

考え	遊びの種類
子ども達だけでさせたい遊び	「観察(生物・植物)」「採集(石・昆虫・植物)」「写生」「笹ぶね」「せせらぎを聞く」「水切り」「生物の鳴き声を聞く」「水に触れる」
保護者がいるならさせたい遊び	「水に潜る」「水に飛び込む」「水に浮く」「水の中を歩く」「泳ぐ」「魚をとる」「釣る」「キャンプ」「散歩する」「花火」
指導者がいるならさせたい遊び	「カヌー」「いかだに乗る」「ボート」「いかだづくり」
どんな状況でもさせたくない遊び	

一方、子どもは大人がいる状況で遊ぶこと、また子どもだけで遊ぶことをどのように捉えているのかについて調査した結果を図2に示す。大人が見守っている状況の方が子ども

もだけで遊ぶことよりも安全であるという認識はあるものの、子どもだけの方が自由に遊べ、楽しいと感じる子どもが多いことが分かった。また、「新しい遊びができる」や「友達をよく知ることができる」などといった項目でも、子どもだけで遊んだ方が高い数値を示した。

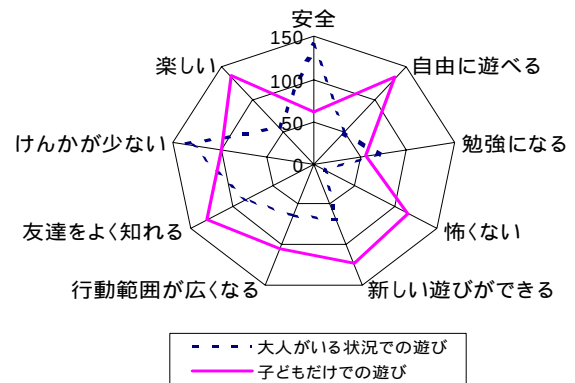


図2 外遊びの捉え方

6. 水遊びに関する教室やイベントへの参加意識

水辺で遊ぶ機会が限られてしまい、遊ぶにも遊び方が分からない子どもが随分増えてしまったのではないかと考えられる。その様な子どもたちに対し、遊ぶ機会や場の提供だけではなく、忙しい保護者になり遊びの指導および安全面での監視をしてくれる体験教室やイベントについての参加意識(図3)を調査した結果、上流のA小学校の児童の方がB小学校の児童よりも教室への参加意識は高く、最も高かったのはA小学校の女子である。

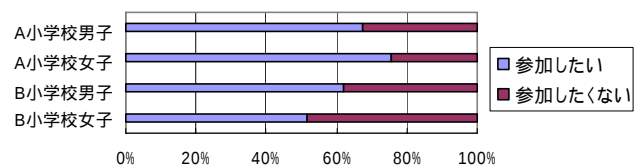


図3 イベントなどへの参加意識

7. まとめ

今回の調査で、発達の効果と水辺の遊びの関係について明らかにしたところ、主に感受性や冒険心などの効果が水辺での遊びで得られるのではないかとということが分かった。ただし、親の経験を元に図-1を作成したため、調査結果は一樣には正しいということとはできないかもしれない。

保護者が子どもの頃は、大人がそばについていなくても、近くの水辺で遊んでいたという意見が多く、水辺で遊ぶことによりその楽しさだけではなく怖さも学んだという。昔のような小川や堰などが減少してしまい、遊ばせたいにもそのような環境がないと言う保護者もあり、体験教室などの様に遊び方の指導だけではなく、同時に水遊びの危険性も教えてくれるような場の提供が必要となってくるのではなだろうか。